

青玉源氏物語和歌集

1	桐壺	皇子遺しさだめはかなき桐ひと葉永久の旅路の哀れかなしも
2	帚木	帚木の消ゆるがごとしあやなくも若き公達雨夜の戯れ
3	空蟬	魂はぬけがらのごと薄衣秘めし憂いに女の誇り
4	夕顔	はかなきは夢まぼろしか一夜花その名も白き夕がほの花
5	若紫	紫のゆかり香ぐわし若草の花ぞ咲きける縁(えにし)深けれ
6	末摘花	陸奥(みちのく)の末より摘みし花ありきその紅(くれない)のあやにくかりき
7	紅葉賀	紅葉賀みやび極めり青海波妙なる調べ天上の舞い
8	花宴	春の夜の宴の契りおぼろげに扇交わせり花酔い人よ
9	葵	物の怪の闇に惑えりうつし身は逢ふよしもなく葵逝きたり
10	賢木	みやこ草おもかげ抱き五十鈴川哀れはるけき恋のみちかな
11	花散里	ひそやかに恋ひ訪なえば橘の香りなつかし花の散る里
12	須磨	嘆きわび憂き世逃れし須磨の浦いつの日帰らん花の都ぞ
13	明石	琴の音のしらべも哀し涙降るゆくえも知れぬ明石の別れ
14	濡標	みをつくし浪路さすらふわが思ひ難波の渦に砕け散るかな
15	蓬生	しのぶ草踏み分けくればゆかしけりくれなる棲めるよもぎふの宿
16	関屋	あふさかの関を越えしぞ幾歳や逢ふも別るも宿世のならひ
17	絵合	左右方いづれ優なり絵の語り殿上人よ栄華の極み
18	松風	大堰里待つは哀しき秋の風奏でる琴の侘しかりける
19	薄雲	紫の魂のゆくへぞ何処にや雲のかなたに逝きたまふなり
20	朝顔	断ちがたき思ひ秘めにしいくとせぞ君忘るるやあさがほの花
21	少女	筒井筒思ひ思はれ少女よ幼き恋のけなげなるかな
22	玉鬘	母かづらおもかげ残すめぐり逢ひ初瀬の宿の奇しき縁しぞ

23	初音	鶯の初音聞かまし母子草生み賜ひしを忘れやはする
24	胡蝶	こてふ舞ひ花散り交うもうるはしき春の花ぞの錦なりけり
25	蛍	放ちたる淡き蛍火夕まぐれおぼろに浮かぶ蒼きまぼろし
26	常夏	常の夏うすくれなるの野辺に咲くいにしへ偲ぶやまとなでしこ
27	篝火	篝火の涼風吹きてゆらめけり恋のほのほと燃えにけるかも
28	野分	野分立ちかいま見ゆるは花のごと露の玉とぞ乱れ散るらん
29	行幸	大原野雪散り舞いて艶なりき行幸ましますさやけくもあり
30	藤袴	むらさきのゆかり懐かし藤袴手折らば露のしずくと落つる
31	真木柱	去りがたき思ひ深けれ我が宿よ真木の柱ぞ忘れかねつる
32	梅枝	春風をたよりにのせて香る花奏の音華やぐ月下の宴
33	藤裏葉	君待ちていくとせ春の巡りきや藤の若葉の花となるらむ
34	若菜上	忍ぶれどわがゆくすゑのとほかりき袖ふる涙あはれなるかな
35	若菜下	わが胸の祈りよ届けとこしへに花はうつろい季(とき)はめぐりて
36	柏木	神宿る柏の葉守哀しけれ命果つとも名こそ忘れじ
37	横笛	亡き人の形見となりし笛の音のまぼろの夢ぞ何をか伝えむ
38	鈴虫	夕月夜命はかなき鈴虫のふりにし声の音も澄みゆけり
39	夕霧	夕霧に惑い佇む忍ぶ恋旅寝の空に想ひ乱れむ
40	御法	常処女あはれ無常の華と散る儂き露の消ゆるがごとく
41	幻	ぬばたまの闇夜つらぬくまぼろしの光ひとすじいづこぞゆかむ
42	匂兵部卿	春の夜の羽風に舞ひし梅の花いづれ紅白匂ひ薫れや
43	紅梅	くれなるの梅の一本(ひともと)手折るれば風の便りのゆくへも知れず
44	竹河	のどやかに花のあらそひいづ方の姫に寄するや桜舞ひ散る
45	橋姫	ひそやかに月下のしづく霧立ちぬ浮き身ぞあはれ宇治の橋姫
46	椎本	たまきはる命果てなむ椎本月もさやかに久遠の別れ

47	総角	総角に結びし縁しはかなくも宇治の川音のむなしかるらむ
48	早蕨	やはらかに萌ゆる早蕨なつかしき亡き人偲ぶよすがとなりぬ
49	宿木	深山木に宿る蔦の葉朽ちもせず宇治の山里色褪せずして
50	東屋	雨そぼる葎茂れる東屋に風吹き入りて薫り立つらし
51	浮舟	むせび泣く宇治の流れに身をゆだねあはれ浮舟病葉のごと
52	蜻蛉	それと見し夢のゆくへぞおぼろなるあるかなきかにかげろふの立つ
53	手習	在りし世の生々流転哀しけり法の御胸に帰らざらめや
54	夢浮橋	幻世(まぼろよ)の松明遠く小野の里夢ぞ儚きうたかたの戀